礼拝説教（2026 年 6 月 14 日）

説教者：中村信哉

父たちよ、子どもたちよ

エペソ人への手紙 6 章 1-4 節

はじめに

週報の「牧師室から」にも書きましたが、6 月の第二日曜日は、キリスト教界では「こどもの日」あるいは「花の日」と呼ばれます。この日は伝統的に、教会の子どもたちが地域の警察署や消防署あるいは駅に、日頃の感謝を込めて花を届けるという習慣があります。また来週の日曜日、6 月の第三日曜日は「父の日」です。今週は「こどもの日」で、来週は「父の日」ということで、今日は「子どもたちよ・・・父たちよ」とパウロが呼びかける聖書の個所を選びました。

イエス様を神また救い主と信じる私たちクリスチャンは、教会生活だけでなく、社会生活もします。家庭を形成し、仕事もします。家庭を形成し、仕事をすることは、人間の本来的な使命です。旧約聖書の創世記を見ると、神様は人間を男性と女性に造られ、**「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」(創世記 1:28)**と言われました。そうして人類最初の人であるアダムとエバは、家庭を形成し、神様が造られたすべてのものを管理する仕事を始めたのです。

私たちクリスチャンは、教会生活だけでなく、社会生活においても神様の栄光を現さなければなりません。私たちの信仰は、教会のことだけでなく、社会での私たちの生き方をも変えるものです。どのように家庭を形成し、どのように社会で仕事をしていくのか、その原則を神の言葉である「聖書」から学ばなければなりません。私たちは、「聖書」の御言葉に従って家庭を形成し、社会で仕事をしていくことによって、イエス様を証ししていかなければなりません。イエス様の福音は、私たちの社会生活をも回復させる力があるのです。

今日は、家庭生活について学びますが、その中でも「親子関係」について学びたいと思います。今日の聖書箇所には、まず**「子どもたちよ」**と呼びかけて、親に対する「子どものあり方」が書かれていて、その後に**「父たちよ」**と呼びかけて、子どもに対する「親のあり方」が書かれています。

1. 主にあって両親に従う

まず「子どものあり方」ですが、1 節には**「子どもたちよ。主にあって自分の両親に従いなさい」**とあります。使徒パウロは、子どもにとって大切なことは「両親に従う」ことだと言います。なぜ「両親に従う」ことが大切なのかというと、それは 2 節にあるように、「十戒」の第五戒で、**「あなたの父と母を敬え」**と書かれているからです。

「両親を敬う」というのは、両親を尊敬する、大切にするということでしょう。しかしあ

る人にとって、両親を尊敬する、大切にする、また従うことは難しいことかもしれません。すべての親が尊敬に値するとは限らないからです。両親がいつも喧嘩ばかりしている、親から虐待されている、親が自分のことばかりで子どもに全く関心がないなど、親から様々な心身の傷を受けていたという人も、現代では少なくありません。そういう人たちにとって、「両親を敬う」あるいは「両親に従う」という戒めは、心が重くなるようなものかもしれません。

しかしパウロは、ただ単に「両親に従いなさい」と言うのではなく、「主にあって」「両親に従いなさい」と言っています。私たちイエス様を信じるクリスチャンは、「神様の子ども」とされています。それゆえ、神様を「父」と呼ぶようにと言われています。

皆さんの中には、すでに両親を亡くした人もおられるでしょう。しかし私たちの「天におられる父」は、今も生きておられます。私たちは「神様の子ども」ですから、何よりもまず「天におられる父」に従わなければなりません。イエス様は言われました。**「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」（マタイ 10:37）**。両親を愛し、従うことは大切なことですが、それよりも大切なことは、神様またイエス様を愛し、従うことです。私たちイエス様を信じる「神様の子ども」は、まず第一に「父なる神様」を愛し、従わなければなりません。

「主にあって」「両親に従う」ということは、神様を愛するがゆえに、両親に従うということです。神様が「両親に従いなさい」と言われるがゆえに、両親に従うということです。

私たちは、人間的には両親に対して様々な思いがあるでしょう。愛せない、尊敬できない、赦せない、そういう思いを持っている方もいるでしょう。しかし私たちクリスチャンは、ただ単に「両親に従う」のではなく、「主にあって」「両親に従い」「敬って」いくのです。たとえ人間的には様々な思いがあっても、私たちがまず第一に従い、愛すべき神様が命じているがゆえに、両親を大切にし、敬っていくのです。それこそが「主にあって」ということではないでしょうか。

また「主にあって」とは、「主の力によって」ということでもあるでしょう。私たちは自分の力では、人間的な様々な思いを越えて両親を大切にし、敬っていくことは難しいことかもしれません。しかし私たちのうちに住んでくださっている聖霊なる神様は私たちに、人間的な様々な思いを越えて、神様の戒めを守り行う力を与えてくれるのです。

また「主にあって」「両親に従う」とは、盲目的に両親に従うこととは違います。私たちがまず第一に従うべき方は神様ですから、神様の律法に背くようなことを両親が求めてきた場合には、決して従うべきではありません。例えば、安息日を破るように求めてきたり、神様以外のものを拝むように求めてきたり、盗み・性的な罪・嘘などを求めてきた場合には、決して従うべきではなく、抵抗しなければなりません。「主にあって」「両親に従う」とは、決して盲目的に両親に従うことではなく、神様の律法に背くように求められた時には「抵抗する」ことも意味するのです。

また「主にあって」「両親に従う」とは、「神様の約束を信じて」「両親に従う」ということでもあります。2-3 節には、**「『あなたの父と母を敬え。』これは約束を伴う第一の戒めです。**

『そうすれば、あなたは幸せになり、その土地であなたの日々は長く続く』という約束です」とあります。両親を大切にし、従う人には、神様の祝福が約束されているのです。その祝福とは、「長生きすること」と「幸せ」になることです。

この約束は最初、イスラエルの民が約束の地カナンで「長生き」し、「幸せ」になるという約束でした。しかしパウロはここで、異邦人のクリスチャンに向けてこの約束を語っています。ですからこの約束は決して、イスラエルの民に対するある一定の時代に約束されていたものではなく、普遍的な約束なのです。私たちがもし、「主にあって」「両親」を大切にし、従っていくならば、私たちは長生きすることができ、幸せに生きることができるのです。

旧約聖書に、**「自分の父や母をののしる者は、必ず殺さなければならない」（出エジプト記 21:17）**という戒めがあります。聖書の中では、両親に対する私たちの態度が私たちの命に関わるものだと教えているように思います。

私たちの「命」や「幸せ」は、神様の御手の中にあります。私たちがもし「長生き」したいと願うなら、健康に気を付けることも大切でしょう。食べ物や運動に気を付けることも大切でしょう。しかしそれよりもまず第一に気を付けなければならないのは、私たちの「両親」との関係であり、私たちの「父なる神様」との関係ではないでしょうか。また私たちがもし「幸せ」になりたいと願うなら、財産を蓄え、夢や目標に向かって歩むことも大切かもしれません。しかしそれよりもまず第一に大切なことは、「両親」との関係であり、「父なる神様」との関係ではないでしょうか。

もちろんこの約束には例外もあります。両親を敬い、神様を愛する人が若くして天に召されることもしばしばあります。立派な信仰を持ったクリスチャンが若くして病に倒れたり、殉教していくこともあります。「ウェストミンスター小教理問答」には、「神の栄光と彼ら自身の（この戒めを守るすべての人の）益に役立つ限り」、この約束はすべての人に約束されているとあります。つまりこの約束は、神様の御計画の中でもちろん例外はありますが、原則的には、「主にあって」「両親」また「父なる神様」を大切にし、従うすべての人に約束されているものなのです。

2. <u>主の教育と訓戒によって育てる</u>

さて次に、「親のあり方」ですが、４節には**「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい」**とあります。ここでは、「父たちよ」と呼びかけられていますが、これは子どもの教育の最終的な責任を委ねられているのは、母親ではなく、父親であるということではないでしょうか。

パウロは、父親に対して「子どもたちを怒らせてはいけない」と言っています。ここでは、父親の支配的な教育、また横暴な教育を戒めているのです。パウロはコロサイ ３：21 で、**「父たちよ、子どもたちを苛立たせてはいけません。その子たちが意欲を失わないようにするためです」**とも言っています。子どもたちは、親が支配的に、また横暴に自分たちをしつけたり育てようとする時に、怒りと苛立ちを覚えるのです。そして、親を尊敬し、大切にし、従う意

欲を失っていくのです。

では親は、子どもたちをどのように育てたらよいのでしょうか。それは、「主の教育と訓戒によって」だとパウロは言います。ここでは、「教育と訓戒」とありますが、それは、「教えること」と「戒めること」です。パウロは、「子どもたちを怒らせてはいけない」と言っていますが、それは決して「子どもたちを甘やかす」ということではありません。親はしっかりと子どもたちを「教え」、「戒め」なければなりません。

では親は、子どもたちに何を教えるのでしょうか。パウロは若い牧師であるテモテに向かって、このように言っています。**「あなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分がだれから学んだかを知っており、また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。聖書はすべて神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です」(IIテモテ 3:15-16)**。親は、自分の価値観に従って、子どもたちを「教え」たり、「戒め」たりするのではありません。親は、神の言葉である「聖書」に従って、子どもたちを「教え」、「戒め」るのです。それこそが、「主の教育と訓戒によって育てる」ということです。

「子どものあり方」にとって大切なことは、「主にあって」「両親に従う」ことでした。そして「親のあり方」にとって大切なことは、「主にあって」「子どもを育てる」ということです。イエス様は、こう言われました。**「わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」(マタイ 10:37)**。自分の子どもを愛することは大切なことですが、神様以上に、またイエス様以上に愛してはならないのです。イエス様を信じる私たちクリスチャンが、まず第一に愛すべきなのは、神様でありイエス様なのです。

神様は、「十戒」の中で次のように約束しています。**「あなたの神、主であるわたしは、ねたみの神。わたしの憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである」(出エジプト記 20:5-6)**。子どもたちを育てるにあたって一番大切なことは、親がまず第一に神様を愛し、神様に従うということです。そうすれば神様は、子どもたちに豊かな「恵み」を与えると約束してくださっているのです。私たちがもし、自分の子どもたちの「幸せ」を願うなら、親が、私たち自身がまず神様を愛し、神様に従わなければなりません。

<u>おわりに</u>

「親との関係」も「子どもとの関係」も、両方の関係において大切なことは、「主にあって」ということです。私たちは、「親との関係」の前に「神様との関係」を考えなければなりません。また私たちは、「子どもとの関係」の前に、「神様との関係」を考えなければなりません。私たちがまず第一に、愛し従うべきなのは、神様でありイエス様です。第一にすべきものを第一にする時、神様は私たちの両親を、私たちの子どもたちを、そして私たち自身を豊かに祝福してくださるのです。

天におられる父なる神様。

私たちは最も身近な家族のことで、様々なことを心配し、心を痛めることがしばしばです。時にその関係が難しく、途方に暮れてしまうこともあります。しかしどうか私たちが、「主にあって」家族のことを考えていくことができますように。私たちがあなたの約束を信じて、まずあなたを愛し、あなたに従っていくことができますように。そして私たちの信仰のゆえに、私たちの家族を祝福してくださいますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。